

大

獅子



龍の巻

獅子文六



新潮社版

大 番

竜 の 巻

検 廃
印 止

昭和三十三年四月二十六日 印刷
昭和三十三年四月三十日 発行

定価三〇〇円
地方 三 一 〇 円
売価

著 者 獅 子 文 六

発行者 佐 藤 亮 一

東京都新宿区矢来町七十一

発行所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七十一
電話(34)七一一一八、九
振替 東京 八〇八番

乱丁本は本社又はお買求めの
書店でとりかえます。

印刷 文京区西江戸川町21・二光印刷 製本 新宿・加藤製本

© by B. Shishi, 1958. Printed in Japan

目

次

珍客来るらし	七
女事多端	一五
十年目の鍋の味	二四
大路小路	三
悪日	四〇
青い火事	四九
おとりもち	五
靄	六
一炊夢	七四
戦塵(一)	八
戦塵(二)	九
新東京	九
強き者	一〇七
故旧新態	一二五
モンベ観音	一二三
金の要る春	一三
青柿を食う	一四〇

底入	四十歳の賭	白鳥の歌	足がため	パルプとゴルフ	億	来客	天女墜落	秘書	すべて良し	内祝	53年型	雨にもめげず	浮かれ牛	七人目	球を拾う	体かわす
----	-------	------	------	---------	---	----	------	----	-------	----	------	--------	------	-----	------	------

一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

太閤さん	二六七
初老	二九五
修羅	三〇三
われ出馬せん	三二一
本来の道	三三八
医師匆忙	三六六
姉ごころ	三九五
呼び水	三四三
ご乱行	三五二
美人薄命	三五九
大団円	三六八

装幀・挿画

宮本三郎

大

番

竜
の
巻

珍客^{きた}来るらし

一

それでも、株景氣のことは、忘れられず、丑之助が、ジツと、齒を食いしばって、相場を見送っているうちに、やがて、年も暮れた。ヨーロッパ戦線では、独軍破竹の勢いだつたが、日本の軍隊も、竜州、鎮南を占領して、氣勢を揚げていた。千日前や新世界を、日曜の外出で、散歩する兵隊の姿も、数が殖えたように、思われた。日本で、一番弱いといわれた大阪師団の兵隊も、戦闘帽という新型の帽子をかぶると、なかなか、勇ましげだつた。

その頃、おまきさんからきた手紙で、彼は、意外なことを、知らされた。新どんが、応召したというのである。あの体軀貧弱で、平和的人物の新どんに、赤紙がくるようでは、日本軍部も、よほど、大規模な作戦を考えた証拠だと、丑之助は、直感を働かせたが、鉄砲を担ぐ新どんが、
「とても、いけねえよ、これア……」

と、グチをこぼす声が、耳に聞えるようで、氣の毒でならなかつた。

そんな情勢だから、国威隆々で、株は、グングン上る一方かと思つたら、そうはいかなかつた。

十五年の四月に、利潤統制要領の発表があると、焚火^{たきび}に水を掛けられたようなことになった。株屋も、今度の景氣が、日露戦争の時とも、第一次大戦の時とも、本質を異にすることに、氣がついたの

である。向う岸の火事で儲けようといつても、今度は、こちらの岸で、火事が始まつてゐるのである。支那事變と称えて、戦争でないような顔をしてるが、日露戦争以上の大戦争になつて、しかも、泥沼に足を突込んだ成行なのである。そして、国内情勢というものが、容易ならなかつた。二・二六は、まだ続いているといつていい世の中で、事業の自由は日毎に狭められ、個人の金儲けは、ご法度に近くなつてきた。カプト町も、北浜も、これでは、脅えずにいない。そこへもつてきて、日独伊三国同盟から高度国防国家体制強化と、赤ッ面の敵役が、バラリと、覆面を脱いだので、見物席はシュンとしてしまつた。新東が、百円近くまで、下落するという騒ぎである。

陣太鼓の音は、長くは続かなかつた。口惜しい、口惜しいと、思い続けた丑之助も、あの時出陣してなくてよかつたと、考え直すようになった。

——こがいな時勢には、ホンマの商売なぞ、阿呆らしゅうて、でけるかいの。ヤミ屋が、ええのや。ヤミ屋が、正業ちゅうもんや。

彼は、フテブテしく、考えるようになった。

ヤミ屋が正業であることを、裏書きしてくれるのは、大阪の同業者の態度だつた。その頃、統制はいよいよ強化され、砂糖やマツチまで、切符制となるに連れ、ヤミの取締りも、嚴重となり、発見されれば、体刑を食う惧れがあつたが、彼等は、屁とも思わなかつた。罰金も、体刑も取引上の損失の一つで、商売をやつていれば、免れぬことと、考えていた。統制令なるものを、守るべき法規とは、考えていないのである。

大阪商人は、先祖代々、役所はムリをいうもの、ムリの下で、いかに巧みに商いをするかが、商人の腕という考えがあつた。東京の実業家のように、政權と結んで、利益を穫るというやり方は、商人として、不精であり、不面目と考へてゐるらしかつた。

統制令は、大きなムリであり、それを潜り、それと戦うことに、彼等は商人の本分を見出してゐた。そして、彼等は、あらゆる知能を絞^{しぼ}り、あらゆる真剣な努力を、惜しまなかつた。ヤミを正業と信じなければ、そんな情熱は、生れなかつた。

そして、彼等は、幕府時代から、全国の物資を大阪に集め、自分達の手で、全国に配給するという誇りがあつた。その誇りを、横合いから、政府が、大威張りで、取り上げようというのである。彼等の面子^{めんつ}としても、これに、反抗せざるを得ない。ヤミ商いは、商人一揆^きのムシロ旗のようなものだつた。

全国で、大阪ほど、あの頃のヤミ取引^{しつよう}きが、大きく、広く、そして、執拗^{しつよう}に行われたところはなかつた。

二

「赤羽^{あかば}はん、おもしろい話があるねん」

茨木^{いばらき}忠吉^{ちゆきち}が、阿波座^{あわざ}の彼の家に、丑之助^{うしすけ}と稲川^{いながわ}を招いて、一ぱい飲み始めた時のことであつた。

家といつても、標札^{ひょうさ}が十枚ぐらい列^りんでゐる路地の奥に、四尺ぐらいの狭い入口を入つて、細長い土間に沿つた小部屋に、三人が、鍋を囲んで、酒を飲^のんでるのである。次ぎの間には、赤ん坊を背負つた細君^{こぎみ}が、針仕事をしてるし、三人ほどの子供が、寝そべつて、雑誌を読^よんでいた。ヤミ商売で、ずいぶん儲けてる男の住居とは、夢にも思えぬ、貧乏らしい風情だつた。そして、鍋の中で、グツグツ煮えてるのは、この土地で半助と呼ぶ鰻^{うなぎ}の頭と、焼き豆腐であり、他には、塩コブと煮豆が、出てるだけだつた。

「何ぞな、おもしろい話ちゅうのは……」

丑之助も、この頃は彼等と盟友の間柄になって、言葉つきも、ゾンザイになった。

「また、堀江ほりえの話とちがうか」

稲川が、トボけた顔を見せた。

「そやない、商売の話やがな……。お前ら百円公定の品物を、百五十円に売って、ポリに聞えても、大威張りで歩けるやり方、知ってるか」

茨木は、ウマそうに、焼豆腐を口に入れた。

「そがいな方法、あるわけないわ」

「落語か、漫才で聞いてきたタネ、聞かしよるんやろう」

丑之助と稲川は、真向から反対した。

「それが、あるんや。わいは、今日、本町の織せんい維問屋で聞いてきたんやが、世の中には、賢い奴が、おるもんやなア……」

「氣イ持たせんと、早う、聞かせ」

「ええか、ここに、百円の品物があるな」

「そら、先刻から、聞いたるわ」

「まア、黙っとれ、その百円の品物を、買手に、百円に売るんや」

「それやったら、当りまえやがな。公定どおりで、何も、おもしろいことあらへん」

「話は、これからや……。その買手が、今度は、品物が氣に入らんいうて、五十円で、売手に戻すのや」

「買手は、五十円、損するのやな」

「いや、買手はグルやさかい、損いふことはないんや……。その買手に、今度は、同じ品物を、百円

で売るんや。そしたら、百五十円で、売ったことになるやないか」

「ちょっと、待ってやんなせや……」

丑之助は、眼を据えて、暗算を始めた。100—50+100=150。算術は簡単だが、狐にツマまれたような気分である。

「なるほど、それそうやが、なんで、そがいになやコシいことを……」

「帳簿の上で、そないするんや。これやったら、経済警察が、なんぼ調べたかて、グウもスウもいへん。大手振って、公定違反がでけるのや。何と、えらいこと、考え出したもんやないか。三段商（わな）いいうのやそうやが、どう見ても、役人より商人の方が、頭が上やな」

茨木は、わが事のように、得意になって、盃（さかずき）を干した。

丑之助も、三段商いの知恵には、感心を惜しまなかった。頭の働きそのものよりも、少しも、官憲の威力に屈しない腰の強さに、感心した。取締りが厳しくなれば、一步を先んじて、その裏をかくヤミ商人は、役人とスポーツでもやつてするような趣きがあった。そして、今のところ、いつも、商人側の勝ちだった。

「そら、当りまえやがな。役人は、家へ戻ったら、職務忘れるやろが、わいらは、寝ても、覚めても、商い一点張りや。儲けること忘れたら、生きとられんやないか。どだい、役人と、心がけがちがうわ」

彼等の腹の底には、そういう自信があるらしかった。

その太々（たて）しさと、徹底さが、丑之助に、多くを学ばせた。彼もカブト町で育ったので、とかく、見栄（みえ）や気前に囚われて、儲けの道を踏み外すことが、ないではなかった。大阪へきてから、彼は、それを反省する機会が多く、そんな、小ッ（ち）ほけな根性では、年来の素志である大金持になることは覚束（おぼつか）ない

と痛切に感じた。

「ところで、留^{とめ}やん、今度の船で、送ろうと思うんやが、ズルチンかサツカリン、回してくれんかいな。なんぼでも、集るだけ、集めて欲しいのやが……」

丑之助も、商人魂に徹しようと、心がけたので、招かれた酒席でも、商談を切り出す勇氣があった。砂糖が、切符制になれば、化学甘味料が騰貴^{とうき}するのは、必然だし、大量に買いつけて、四国に送る外にも、大阪で儲けてやりたいと、考えたのである。

「そら、赤羽はん、こつちで、頼みたいほどや。甘味剤やったら、羽根が生えて、飛びよるさかい……尤も、あんたが、七・半まで、張り込んでくれはるのやったら、探してもええが……」

「ええ七・半？ 殺生なこつちやないか」

「それ以下やったら、どもならんわ」

親しき仲にも、ソロバンあり——これも、商人魂の表われであらう。

「仕方ないわ。通天閣から飛び下りた気で、七・半で頼んますらい……」

丑之助の口調も、よほど、大阪商人臭くなってきた。

三

丑之助も、ヤミ商売を、面白半分なぞと考えず、他日の再起に備えて、儲けを蓄積する気になったから、本腰を入れて、商売に励んだので、成績はぐつと上ってきた。そして、虚栄心を捨てることも、覚えたので、好きなおシャレもやめ、国民服ばかり着ていた。一ぱいやりたくなっても、蛸梅^{たこうめ}とか、正弁丹^{せいべんだん}とか、安くてウマイ店に限っていたが、遊興の方だけは、虫を抑えることができなかった。

相変わらず堀江には、よく通った。

三日にあげず、白玉しらたまはんの顔を見に行かないでいられたかった。遊び方も、次第に、大阪風の元費節約主義を覚えてきたが、それでも、土地の人よりは、気前がよかった。遊里にくると、妙に腹が減つて、誂あつちえ物がしたくなつたり、チップがやりたくなつたりするのである。

従つて亀屋の上客であり、馴染みになると、ひどく親切にする土地の慣いで、わが家のような居心地を、味わされて、つい、足が近くなるのだが、このところ、連日のように通勤して、朝帰りも、少し手間がとれた日のことだった。尤も、亀屋を出たのは、そう遅くもなかったが、廊くろわ近くのスマンダという店で、一ぱいやつたが、バカに酒がウマかつたので、腰を落ちつけてしまった。スマンダとは、おかしな屋号だが、隅ッコにある店という意味だそうで、やはり、午前中だけ商売をするが、精進物を主とした、ウマくて、安い店だった。

彼が、伊予常に帰つてきたのは、九時を過ぎていた。この頃では、おカミさんも、丑之助の放蕩に呆れて、意見もなくなつたが、彼が、二階に上ろうとすると、

「赤羽はん、手紙来とりまつせ」

と、速達の赤印のある封書を、渡してくれた。

手跡を見ると、紛まじう方なき、おまきさんの鉛筆書きだった。

——何ぞ、急用かいな？

彼女が、速達なぞ寄越すのは、珍しいことなので、丑之助も、部屋へ入ると、すぐ、封を切つた。

——何やて？ おまきさん、大阪へ来るんやて？

丑之助は、驚いた。

紀元二六〇〇年の橿原かしはら神宮参拝の団体旅行が、四谷の三業組合で催され、おまきさんも、急に参加

することに、奈良、京都は見物するはずだが、彼女は、途中で仲間と別れ、十九日に、大阪の丑之助を訪ねるから、久々に顔を見て、積る話をしたい、——着く時間は、いずれ電報で知らせるという文面が、よほど急いだらしく、乱暴な走り書きにしてあった。

——十九日ちゅうと、明日やないか。

丑之助は、話の急なのに驚き、かつ、喜んだ。

彼だって、おまきさんには逢いたかったのだが、その目的だけで、東京へ行くには、多忙な生活だった。何かの用にかこつけて、一度、出京したいと思っているところへ、彼女の方から、足を運んでくれるのは、何より有難い。ちょうど、法華津丸の入港まで、後、一週間あるから、その間に、ゆつくり、彼女の大阪見物もさせたいし、積る話やら、積る愛情やらも、放出したい。彼女の宿も、なまじ、旅館なぞへ連れていくよりも、気心の知れた、この下宿がいいではないか——

彼は、手を鳴らして、おカミさんと呼んだ。

「あのなし、明日、東京からお客さんが来るのやが、夜具、ありますかいな」

「夜具ぐらひありますが、お部屋は……」

「部屋は一緒にかんまんですらい。オナゴの客だすけん……」

「オクタ、そがいな仲のお客さんだすかいな。そら、あんた、何ぞオゴリなはれ……」

丑之助は、相好を崩して頷いた。

夕刻には、待ち兼ねた電報がきて、明朝九時半に、上六駅に着くということで、一層、嬉しくなり、下宿の晩飯に、一本つけさせたが、軽い酔いが廻ってくると、よくない量見が、起きてきた。

——おまきさんが来ると、当分、堀江へも行かれんことになるが、ちょっと、顔出してやるか。

彼は、早速、身支度をした。薄情というのか、多情というのか——とにかく、応報を受くべき所業